

第2回有識者検討会議でのご意見について

資料2

		ご意見	考え方	
1	計画全体	CO2排出量削減の課題をどこかに明記し、解決に向かっていただきたい。	「第2章 現状と課題」に課題として記載。	
2	省エネ	家庭の取組に「節電やリサイクルなどによる行動変容を踏まえ」といった『行動変容』というワードを使っていただけないか。	第4章の2の(2)(家庭部門)に追記。	
3		・『全員参加』とか、未来に『貢献』とか、自分が参加しているんだよというところをもう少し入れ込めないか ・家庭の取組について、道から情報を提供し理解促進、学習機会を設ける段階はもう終わりつつあって、自分の取組が役立っていることがフィードバックして見える社会が少しずつ求められている。『学習』よりももう少し先のところを『参加』とか『行動変容』、『貢献』といったニュアンスの言葉があると良い		
4		「性能向上リフォームを促進します」という表記については、残していただきたい。		ご意見も踏まえ、表記は残しています。
5		産業部門は、鉄鋼、パルプ工業、コークスでの還元から水素、電炉、自家発といったところのエネルギー転換も求められていて、何かその産業へのメッセージというものが書かれてあればいい。		第2章(現状と課題)の3のイ「産業部門に関する課題」に趣旨を記載。
6		太陽光についてはいずれも自家消費型というキーワードが入っており、国の政策でも自家消費型が入っているが、ここを殊更に強調した方がいいのか。		第4章の2の(1)のイでは既に自家消費型については触れており修正せず、(2)のイについては、現行の計画に記載のある文章の補足の形で自家消費について追記。
7	自家消費の消費側の準備も進めなければ、頭打ちになるのではないかと。需要構造の変化を訴えかけるような文言を入れ、早めに動きを誘導しなければ変わらない。	第4章の2の(1)のイ及び第4章の2の(2)のア及びイに、需要サイドへの働きかけ(需要規模の増大など)の趣旨の記載を追記。		
8	エネルギー基地北海道という項目に、送電インフラ整備などの国への働きかけというところがあると思うが、供給側サイドの記載になっているが、需要側への働きかけという辺りもやはり非常に大きいと考える。北海道においては新エネの賦存量が事業の規模を大きく上回ると言ったような構造的なところもあるので、この辺りの観点を追記してはどうか。			
9	太陽光は、やはり雪国という道の特徴を踏まえた上での設置、あるいは効果の検証、道民に対するメリットの提示も課題として挙げていかないと、国が言ってるのでという感覚だと厳しい。		第4章の2の(1)のイに「適地を踏まえメリット提示するなど」の取組について追記。	
10	変動電源を上手く活用できるような産業を育成という記述をもうちょっと強調していただければ。	第4章の2の(1)のイに新エネを活用した立地促進について記載。		

第2回有識者検討会議でのご意見について

資料2

		ご意見	考え方
11	ロードマップ	<ul style="list-style-type: none"> ・ロードマップは需要側への働きかけも大きい、北海道は新エネの賦存量が需要の規模を大きく上回る構造的なこともあり、この辺りの観点を追記してはどうか。 ・道外移出というだけでなく、本道の強みとして、道内産業のさらなる発展につなげていく発想を、道民の皆様と共有できればと思う。 	ご意見も踏まえ、ロードマップの記載を見直し。(資料5)
12		技術が進んで普及という願いも込め、各家庭、企業が取り入れていく選択肢として2030年や40年50年ぐらいに出てということをはっきりロードマップに入れるといい。	
13		数値の目標も入れていただくとよい。何年までにはどのような数値目標があるんですよっていうことを皆さんに理解いただけるような形で取り入れてはどうかかなと感じた。	
14		見た目でも数値的なものが入っているとわかりやすい。全部は入れられないというのはその通り。ただその中で、例えば、2035年の新車100%とか、ZEHとか、道の目標の中で数値化できないものであれば、国の目標を示すなりして、シンボリックなものを入れた方がわかりやすくイメージしやすくなる。	
15		<ul style="list-style-type: none"> ・ロードマップも『省エネ』というものに囚われすぎている。「徹底した省エネ」は新エネルギーを最大限有効利用する「活エネ」というような2050年で未だに頑張って省エネしているというイメージではない。 ・2050年、目指すべき姿は明るいものでわくわくするような姿が必要。そこで省エネの一番上に徹底した省エネエネルギーとくと、我慢しているような印象 ・2050年に今省エネに書いていることは2030年までの話、2050年は、新エネを最大限に利用する社会構造、我慢しなくても自然に省エネ。 	
16		省エネで、エネルギーを使わないのがいいというのであれば、エネルギーのない社会を目指せばいいのであって、そうじゃないと思う。適正なエネルギーを使って快適な社会であると。だから、快適な社会というようなイメージ、エネルギーが適正に使われて快適な社会というようなイメージじゃないのかなという気がしています。	
17		2050年が省エネと新エネ、新エネも二つに分かれて三つの帯になっていること自体がまず駄目ではないか、一つではないか。新エネも省エネも一体となって、エネルギー政策は完結して、カーボンニュートラルになっている。	
18		現状の右の二つ目のカテゴリは何なのか、初めて見る人がわかるために是非埋めていただきたい。	
19		三つの挑戦がどこに行ったのか、三つの挑戦との関係がこのロードマップでは、少し見えづらい。2030年に三つの挑戦が完遂するのだというようなイメージで書くと、概要版との整合性も出てくる。	
20		誰に向けたメッセージなのかをわかるようにすると、ロードマップを見た道民の皆さんが自分ごととしてとらえられる。	
21		<ul style="list-style-type: none"> ・脱炭素ロードマップと行動計画の両方からメッセージが届く。整合された方が道民は、わかりやすい。 ・ゼロカーボンが、単に数字のボリュームだけではなく、脱炭素の流れの中で北海道経済、自治体経済をどう成長させていくのかという視点は共通。少しリンクした部分があるロードマップであれば、道民に対し統一の持ったメッセージであればいい 	
22		「一体いつまで省エネするんだ」というのは、窮屈な気持ちにということでは理解できるが、だからといって、ゼロカーボンを目指すためには、省エネルギーを絶対外してはいけない。	
23		省エネ意識の醸成は、家庭や教育現場といったところから意識醸成が高まっていく。家庭での意識が業務や運輸、産業にも反映してくるのではないかと考えており、今後、家庭向けですとか、産業向け、運輸向けだとかの資料を作る時には、そういったことを意識しても面白いかなと思う。	
24		省エネも地産地消も北海道の特性、気候も含めての特性ということが読み取りづらいので、北海道から発信ということで、もう少しそういう地域のいいところも厳しいところも含め、メッセージとして読み取れるといい。	
25		北海道型の太陽光パネルの設置など一言工夫があってもいいかなと思った。	

第2回有識者検討会議でのご意見について

資料2

	ご意見	考え方
26	2030年といえども大幅なCO2削減ですから、CO2排出量により着眼した、何か指標も、引き続き検討していただきたい	ご意見も踏まえ、目標値を検討。(資料6・7)
27	・産業部門以外は、全体的な国の平均的なアプローチとの数字の整合性もあり、引き上げを検討という方向でよろしいと思う。 ・産業部門は、かなり高い目標を現行でも掲げているので据え置きということだが、率先して北海道が省エネに資するという観点で、他部門とトーンを合わせ引き上げ方向で検討し高みを目指すという方向があってもいいが必須ではない。	
28	・新エネ導入目標について、各電源のキロワットの観点で目標が設定されており、本質的に必要なのは、キロワットアワーの観点で、利用量をどう増やすかを考えなければいけない。 ・現状の二倍の各電源が入ってきたことになると、自ずと出力抑制という話が出てくる。キロワットの観点だけではなくキロワットアワーの観点で、目標設定するのが重要。	
29	・入ってくる再エネをいかにうまく使うかっていう点で、今、電気ではない需要をいかに電化していくかという観点が非常に重要になってくる。 ・導入のモチベーションを上げるという側面と、エネルギーを有効に使うという両面から、電力の需要を創生していくかということを考えなければいけない。	
30	・陸上の137万が、FIT認定済み案件がすべて運転される水準で、非常に堅実な積み上げに基づいた目標数値の設定になっている印象。 ・積極的な目標という意味では、北海道電力の申し込み状況も踏まえ、陸上風力に関してはもう少し大きな数字にしていかないと、現実からは後れを取ったような目標になってしまう可能性があるのではないかと。 ・洋上の方の205万は洋上風力産業ビジョンをベースにされているのですが、洋上については開発から運開まで10年ぐらいかかるので2030年断面で間に合うか。	
31	・バイオマスについては、FIT認定済みというところで、54万キロという設定になっており、多くはおそらく木質バイオマス発電、燃料調達等々で限界がある。 ・北海道の場合、家畜ふん尿、或いは食品、加工残渣といったメタン発酵の方をもう少し重点おいて考えてもいいのではないかと。 ・乳牛だけで北海道で80万頭。5%ぐらい処理で全部発電という数字に置き換えるとおそらく15万16万ぐらいになっていくので加味して考える必要がある。	
32	・太陽光の引き上げについて、国の今後の目標をベースに400万キロワットアワーという一つの指標が出ているが是非引き上げの検討をすべき。 ・需給一体型ということで、PPAモデルを中心に、国の施策と合致させやってくべき。 ・地面も可能性として、北海道の耕作放棄地、大体2万ヘクタールぐらいあり、そのうち農業をやっていない土地が半分、1万平米ぐらいあり、単純に1ヘクタール1メガで単純に考えれば、1000万キロ。800万とか、700万とかのポテンシャルはあるのかなと思っている。 ・最近ゴルフ場の閉鎖がコロナの影響ですごい。18ホールで150万平米ぐらいあるので、好条件のゴルフ場を活用するだけでも、相当な量の太陽光は設置できる。	
33	省エネは厳しいものになるので、地域特性を考えたものにした方がよい。	
34	省エネの引き上げの余地があるのではないかとブルーになっているところがあるが、これはプラスアルファの施策、掘り所、上げる時の裏付というか、そういう意味でのことを確認したい	
35	温対法の改正法のポジティブゾーニング、民間企業に色々お願いし、官民一体となったコンソーシアムの中での取り組みの一部も。そういったところで、自分たちだけではできない、連携を含まないと、プラスアルファはいかないと思うのでその辺の書きっぷりも工夫していただくと実効性が高まる。	